

令和4年度第2回社会教育委員会議 議事録

- 日 時 令和4年11月30日(金曜日) 午前10時30分から午前12時00分
- 場 所 市役所第2別館 第2会議室
- 出席委員 矢野 憲文委員、香川 真澄委員、榎崎 八由美委員
富永 恵美子委員、長谷川 義明委員、大本 章男委員
平中 政明委員、半矢 幸子委員、江中 幸夫委員
吉本 光良委員
- 事務局及び出席者 藤山教育部長、船林社会教育課長、亀田主幹
安藤係長、柿並係長、來嶋係長、縄田主事
- 会議次第
 - 1 委員長あいさつ
 - 2 報告
 - (1) 令和4年度山陽小野田市地域交流センター利用に関するアンケート調査結果について
 - (2) 第64回全国社会教育研究大会広島大会兼第44回中国・四国地区社会教育研究大会の報告について
 - (3) 第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理【概要】
 - 3 議題
 - ・人材発掘を企図した地域交流センター主催事業の具体について
～地域貢献を進める人づくりの実践～
 - 4 社会教育課長あいさつ

事務局 みなさまお疲れ様です。定刻より少し早いのですが、委員の皆様お集まりですので始めさせていただきます。令和4年度第2回社会教育委員会議を開催します。本会議の事務局を担当しております社会教育課の來嶋です。どうぞよろしくお願いいたします。本委員会は、「山陽小野田市執行機関の附属機関」に属しますので、「会議の公開に関する要綱」により、議事録をホームページで公表させていただきます。また、本日は14名中10名の委員の御出席で過半数となっておりますので、本会議が成立しますことをお伝えいたします。本日の会議の次第は、要項表紙の裏に記載しておりますので、この次第に沿って会議を進めてまいります。本日事務局の藤山部長ですが、議会对応のため少し遅れてまいります。申し訳ございません。それでは、次第の1番、吉本委員長より一

言ご挨拶をお願いいたします。

委員長 みなさんおはようございます。みなさん資料が机の上に置いてあると思います。「令和4年度社会教育士取得者一覧」これがありますでしょうか。当委員会において、長年要望しておりました社会教育主事並びに社会教育士の養成をお願いします、ということで長年申し上げておりましたけれども、新しい制度の社会教育士の取得者一覧ということで、山陽小野田市で社会教育士の資格を取得しておられる方が今年度7名ということになります。これは、新しく取得されたということによろしいですか。

事務局 はい、そうです。

委員長 どうもありがとうございました。要望を叶えてくださいます。それでは、今日、令和4年度の第2回の会議ですけれども、令和2年度からの流れをちょっと振り返ってみたいと思います。コミュニティ・スクールの仕組みを生かした地域連携教育についてということで進めてまいりまして、令和2年度の第3回目は竜王中学校で報告がありました。学校・地域の協働について、今まで学校への支援という言葉だったが、支援ではなくて、みんなで立ち上げていこうという話がまとまりつつあったんですが、急に令和3年度の第1回の会議で公民館を令和4年度から地域交流センターにするという方針が打ち出されました。これは大変だということで第2回の会議で、そのセンター化に対する当委員会としての意見書をまとめて提示することになって、それを委員会議で図ってすぐに提示しました。第3回の会議では、センターに対する具体的な姿が見えてきたので、社会教育委員としての要望を申し上げた。

令和4年の7月にあった第1回目の社会教育委員会議において、公民館が市長部局へ移ったり、部局の変遷ですね。新しい地域交流センターとなった実態を、アンケート調査をして調べてみようということになって、アンケートをとることをここで承認した。そのアンケートの結果が出たようですので、まずここでその報告を受けて、今後のことを皆さんで協議したいというのが、今日の社会教育委員会議の議題であります。それでは、どうぞ皆さまご協議のほどよろしくをお願いいたします。それでは、このまま議事に入ってもいいですか。

事務局 はい、お願いいたします。

委員長 はい、それでは2番の報告。「令和4年度山陽小野田市地域交流センター利用に関するアンケート調査結果」についてご報告をお願いします。

事務局 はい、社会教育課の柿並です。では、私のほうからご説明をさせていただきます。座って説明させていただきます。それでは資料の(1)と(2)をご覧ください。第1回目の社会教育委員会議でご報告させていただきました。「令和4

年度地域交流センター利用に関するアンケート」の取りまとめ結果について、ご報告させていただきます。

今年度より、センターとなった施設においてさらに効果的な役割を果たしていくため、この7月にアンケート調査を行いました。調査期間は、7月から9月末までの3か月間とし、各センターからセンター利用者や学校経由による保護者等、合計1,009名からご回答をいただいております。12の設問を設け、紙ベースによる回答、又はQRコードを読み取ってもらい電子申請による回答を頂いているところです。各センターの広報誌に掲載したり、学校へお願いし、児童・生徒を経由し、保護者に配布するなど、各センター長に配布方法については工夫してもらいました。計1,009件の回答の内、約230件がQRコードを読み取り回答していただく電子申請を利用いただいているところです。では、早速ですが問1からご説明させていただきます。

○問1、回答者のお住まいの校区については以下の通りとなっています。

○問2の男女比についてですが、男性の回答数181件に対し、女性が820件となっています。割合にして、男性17.9%、女性81.3%となっており、電子申請分もありますので一概には言えませんが、利用者の占める割合は概ね女性となっています。

○問3については、年齢別の割合です。70歳代が最も多く320人、次いで40歳代が223人、60歳代が139人となっており、その他は表のとおりとなります。30歳代、及び40歳代が多いのは電子申請の占める割合が多く、学校経由で保護者が回答しているものと思われます。逆に、70歳代の回答は電子申請で回答している方は320人中7名に留まっており、ほぼ施設利用者が利用の際に回答されたものと思われます。

○問4について、職業についての問いになります。回答者の内、主婦・主夫の占める割合が31.5%、次いで会社員、公務員・団体職員が20.5%、無職が20.4%、パート・アルバイト18.7%となっており、比較的時間に融通の利く方が回答者となっているようです。ちなみに、電子申請での回答者は、会社員、公務員・団体職員が83名、パート・アルバイトが81名となっており、仕事をされている方が、電子申請を多く利用され回答を頂いている状況です。

○問5、続いて、参加しやすい時間帯について複数回答可で質問をしております。平日、土曜日、日曜日に分け、さらにそれぞれ午前、午後、夜間に分けて利用しやすい時間を聞いております。ここからは、回答者全体の割合と20歳未満から50歳代、それから60歳以上で別々に表に示しております。まず、地域交流センターの講座やイベントに参加しやすい時間帯は、全体では「平日の午前」が489人と最も多くなっております。世代別で見ると、20歳未満～50歳代は、「日曜の午前」が171人と最も多く、次に「土曜日の午前」が134人と多くなっています。平日では、60歳以上が、午前が394人と最も多くなっているのに対して、20歳未満～50歳代の世代は、「夜間」が115人と最も多くなっていることがわかります。

○問6、続いて「地域交流センターの情報をどのような方法で知りたいか」についての問いです。地域交流センターの情報の入手方法は「市報」が667人で最も多く、次に地域交流センター作成の「センターだより」が285人、続いて「チラシ・ポスター」が283人で多くなっています。世代別で見ると20歳未満～50歳代は、60歳代以上と比べ「ホームページ」が多いが、「センターだより」が少ない結果が出ています。ちなみに、電子申請での回答結果は、市報が149人と最も多いが、次いで「ホームページ」が76人、「チラシ・ポスター」が74人、「センターだより」が42人となり、SNSの利用が多く見受けられるようです。また、市報が多い理由としてが、回覧版ではなく各戸配布をしていることが理由としてあげられるのではないかと推測されます。

○続いて問7「よく活用するSNS等は何ですか。複数回答可」についてです。ご覧のとおり、「LINE」が696人と圧倒的に多くなっています。今年度もデジタル推進室と共催で行う各センターでのスマホ講座でもセンター長からは、ラインについての時間を設けるよう要望を頂いているところです。

○続いて問8の「地域交流センターの良いところは何ですか」という問いです。全体では、「興味のある講座・イベントをしている」が最も多くなっており、次に「職員の対応が良い」、すいません。記載の誤りで、「職員の反応が良い」を「職員の対応」に変更をお願いします。これが、267人と多くなっています。世代別で見ると、20歳未満～50歳代は、「特になし」が最も多くなっており、地域交流センターへの関心度が低いことが推測されます。

○続いて問9です。「地域交流センターが今後、充実すべきと思うサービスは何ですか」の問いについて、全体では「主催講座」が271人で最も多く、次に「地域の人のコミュニティの場づくり」が249人と多くなっています。世代別で見ると、20歳未満～50歳代は、「放課後、休日の中高生の自主学習の場の提供」が181人と最も多くなっており、次に「地域の人のコミュニティの場づくり」が121人と多くなっております。また、この問いに対して、複数選択可能にもかかわらず、「わからない」と回答された方が108名いたことについても、驚いているところです。

○問10です。「受講したい講座、または地域にとって必要と思う講座は何ですか。複数回答可」です。全体では、「健康づくり」が372人と最も多くなっています。センター事業も健康体操や医者のお話、ヨガ、健康料理など多く取り扱っているところです。世代別で見ると、20歳未満～50歳代は「子ども向け」が167人と最も多くなっています。ちなみに、電子申請では、「興味関心があること」という具体的なことが示されていない項目が84人と最も多く、次いで「子ども向けに関すること」が82人、「子育て支援に関すること」が64人、「デジタル活用に関すること」が62人となっていました。

○問11です。「問10で選択した項目の具体的なアイデアを記入してください」というものです。これは、全部は説明できませんが、普段よくセンターに通っている方は、地域関連や防災、健康づくり、次のページの文化教養に関してご意見をいただいているようです。逆に保護者世代については、スポーツダ

イエット等の健康づくり、子育て支援、子ども向けなどについて意見をいただいています。FXやNISA、キャンプの基礎知識の講座を要望される方もいらっしゃいました。

○問12については「その他地域交流センターの利用にあたってご意見・ご要望等がありますか」という問いです。主に、ハード面での要望、施設使用の予約方法、講座・イベントについて述べられております。以上、簡単ではありますが、センターアンケートの報告になります。

委員長 はい、ありがとうございます。何か気になることがあるとか、ちょっとここ聞いてみたいということがありましたら、お願いします。

委員 これは、地域別に出ているのですか。

事務局 地域別のもは、まだ出していないが集計は各センターに出してもらっています。

委員 地域によってセンターの利用、センターへの興味というものはだいぶ違うと思う。そのあたりを知りたい。

委員長 今回のアンケートで地域別のもを用意してもらいたいということですかね。各センターに行ってもらいますか。

委員 地域別のグラフ等の表が配布されているのか。

事務局 とりあえず、今現在は、全センターをまとめたものを表にしています。各センターには、それぞれ紙ベースで回収したもの、それから電子申請で回答のあった結果をセンターに配布しています。各センターが集計して自身の館で今後の活用について検討されていらっしゃる館は既にあるかもしれません。私どものほうで、各館の表の作成については、数も多いので手を付けていない状況です。

委員 私は、赤崎ですがどういう状況か知りたい。赤崎のセンター長と、今後どういうことをしていくか話をしていきたいと思っている。そういうことです。

事務局 ありがとうございます。

委員長 地域別の問題もあるから、早めに解決をしていきたいということですね。

委員 それと、地域別の集計を見て情報交換とかですね、そういうこともしてみたい。

委員長 あとで報告もあると思いますが、センターでの活動の違いもありますから、そ

れを見ていくと全体アンケートの差も出てくると思いますね。地域間の交流もあってもいいかなと思います。

事務局 各センターへ紙ベースで回答いただいたアンケートは、各センターでデータを入力し集計をして社会教育課へ提出いただいています。なので、センターがそもそもデータはもっているという状況です。各センターのグラフは、まだ作っておりません。電子申請分は、私のほうからセンターへデータは送っています。

委員 他の校区と比べてどうだったかというのを知りたいし、そうすると良いところは良い、悪いところは改善していくよう促さないといけない。

委員長 各地域交流センターの働きかけによっても、アンケートの回答の世代も変わってくるだろうし、それも考慮しなければならないのかもしれない。他にありますか。

委員 高千帆の長谷川です。私の校区でも、地域交流センターの位置づけなり、その先にある地域運営組織の問題等、非常に関心を持って検討しているところですが、実は先般、私どもの地域運営組織検討チームと、市議会の某会派の面々と意見交換を行ったのですが、アンケートの内容について集約したものを高千帆地域交流センターから頂いた。一つ愕然としたのが、調査内容に示されている高千帆のアンケートの協力度合いがこんなに低いのかと。これは、先ほど委員長がおっしゃったように、センターでの例えば、利用者に対する働きかけがほとんどなされていなかったという話を聞いている。大本委員からも話があったように、議員団との意見交換の中でも、課題は地域によって異なるということなので、まさにそこのセンターを利用する人の意識というのは、地域によってまちまちであろうと。したがって、社会教育課のほうで、事務局でこれを全部地域ごとに分析して比較してなどということをして、と申すことを申し上げることはさらさらありません。センターに電子情報を含めて、アンケートの関わる結果をすべてお返しいただけたら、私どもはセンターと内容について分析する用意はあるので、是非お願いしたと思います。

委員長 はい、ありがとうございます。その他、ありませんか。ないようであれば、次に参ります。括弧の2番、第64回全国社会教育研究大会広島大会兼第44回中国四国地区社会教育研究大会の報告について事務局よりお願いします。

事務局 はい、失礼します。私の方から説明させていただきます。10月27日、28日の2日間、広島市の平和公園横の「広島国際会議場」において、第64回全国社会教育研究大会広島大会兼第44回中国・四国地区社会教育研究大会が開催されました。本市からは、吉本委員長と柿並係長、私の3人で参加させていただいております。

2日目は、それぞれが分かれて分科会にも参加しました。資料をお配りしておりますが、初日のシンポジウムと分科会を合わせて、まず吉本委員長から、復伝をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

委員長 それでは、資料5が大会の冊子であります。宮島の鳥居、原爆ドーム、百万一心という言葉が掲載されているこれです。それと今日お手元に配られた5枚綴りの文字ばかりのものがあると思います。これを基に申し上げたいと思います。第64回全国社会教育研究大会広島大会、それから中国・四国地区社会教育研究大会の報告書となっております。大会スローガンが、「多様性を生み出し『百万一心』の心根で未来をつくる社会教育」。それから、研究主題は「これからの時代を見据えた学びのデザイン、ニューノーマル時代における社会教育の在り方」。カタカナばかりがどんどん増えてきていますね。ニューノーマルというのは、新しい生活様式。ノーマルは普通ということですよ。だから生活様式がどんどん変わってくる。コロナ禍やデジタル化になってくる。色々なことが出てくる。その変化の時代で社会教育はどうあるか、というのが研究主題です。

それで、アトラクションがあつて、記念公演が広島のサンフレッチェ広島の代表取締役の講演がありました。広島でのサッカーの始まりは、広島の師範学校、今の広島大学ですね。広大教育学部、それから第1次世界大戦で日本に捕虜にされ連行されたドイツ軍によってサッカーは広島に伝えられたということでもあります。ドイツ軍が捕虜にされたのは、ユーハイムという和菓子、年輪の。それと、このサッカーと、それと徳島の捕虜収容所で始まった年末の第九ですね。ベートーベンの第九。一番下のほうにアンダーラインが引いていますが、サンフレッチェ広島が存在するのは、広島とサッカーとの係わり、歴史や伝統を大切に、地域全体で自治体も企業も個人も皆で楽しみ、はぐくみ、育てたからです。社会教育も同じことだと存じます。歴史や伝統を大切に、地域全体で、自治体も企業も個人も皆で楽しみ、はぐくみ育てる事が大切だと存じます。皆様のご活躍を応援しています。というのが最後の締めくくりでした。

それからシンポジウムがあつて、「これからの時代を見据えた学びのデザイン、ニューノーマル時代における社会教育の在り方」ということで、コーディネーター、シンポジスト4名で始まりました。私の記憶に一番残ったのは、①の小田圭介さんという方。静岡の人でしたけども、そこに書いてありますが「社会教育は地域のインフラだ。良い畑があれば、野菜は自然に育ちます。その良い畑を提供すれば、良い社会教育の場となります。従来の押し付け型の社会教育に拘ることなく、参加者が自由に創造する社会教育の場、それが“何もしない合宿”なのです」。何もしない合宿というのを始められたそうです。それは何かと言ったら、もともとヨーロッパの国で結婚し、子供を連れて帰ってきた。帰ってきたら皆からはじかれる。何かしなければならぬ、ということで合宿を始めた。自分は場所だけ提供して何もしなかった。ただ合宿をするだけ。もう一回やりますよと声掛けをしたところ、今度は中学生がサッカーボールやオ

セロを持って来た。それで皆が能動的に、当然やるんなら楽しくしなきゃと、どんどん次から次へと色んな事ができて活性化が始まって、それが県内にどんどん広まっている。という話でありました。シンポジウムのコーディネーターの最終的なまとめを下にまとめました。学校教育での社会教育の一番大切なことは、中学生が如何に関わるかです。教える側となって、能動的に関わることで、初めてその社会教育活動の意味がわかります。これからの社会教育は、参加者が自ら能動的に参加する。自主参加型の社会教育現場をいかに提供するかが重要になると存じます。という締め括りでありました。色んなことを、色んな講座をやっても、いつも受けるばかりでは先生になり得ない。郷土との関わりはだいたい小学校で終わる。教えることをしないから残らない。中学生になって、小学生に教えることをやらせると中学生が先生になるから、そしたら記憶に残るんだと。という話でございました。それでシンポジウムは終わりました。

それから次の日、第3分科会のテーマは、「人生100年時代を見据えた社会教育の在り方」。私もすぐに後期高齢者になりますけど、人生100年時代であと25年がんばれと言うことですね。富山からの発表がありまして、令和2年に市長が「兎追いしかの山」の“ふるさと”の第四番の歌詞を作ったらどうかと、市長がおっしゃって。やってみようというプロジェクトが始まった。発表者の松野健作さん83歳と言われたかな。この活動を通して、ニューノーマル時代。新しい生活様式でのすべての世代に活躍の場を与える社会教育の現場が垣間見えた。人生100年時代、今回の事例をモデルに地域の高齢化の能力を伸ばし、活かせる場、讃える場が全国に広がることを期待します。85歳か86歳だと言われていたこの人が、私は皆から褒められて、大変に舞い上がってたくさん仕事ができる。だから年寄りを褒めることをしてください。ということをおっしゃっていた。兎追いしの第四番の最後を作るということで、みんなが自分の郷土を思い直して良い歌詞を作ろうと色んな応募があった。1,000件を超える応募があって全部を調整して、最後に表彰状をあげたということでした。

それから、東広島市の事例発表です。東広島市は4つの大学がありまして、大きな研究機関がたくさんあるところらしいです。瀬戸内海からずっと山手まで入って、本当に大きな市です。人口19万人。東広島は県の社会教育と一緒にあって「市全体を学びのキャンパスに」を目標として、豊かな学びの支援、学びを通じたつながりの推進、学びを支える環境づくり、を市の生涯学習の基本施策として始めましたと。それでテーマの「東広島熟年マイスター教育講座」というのを東広島市が始めました。老いとは何だ。という講義から大学の先生、研究所の職員を通じて専門的な講義から始めていったそうです。アンダーラインの部分ですが、老いの基礎・基本を体系的に学び、安心して暮らせる地域社会の担い手となってくれる人を育てる講座、即ち「学びの好循環」を育成するための講座です。一生懸命講座をやって、令和2年、3年、4年と段々と広めていったということでございます。その下のアンダーラインですが、今後も、

地域社会の担い手の育成に努力します。となっています。結局学びっぱなしで、新しい講座を作ったら、これ終了しました。次もまた終了しました。はい、ありがとうございます。どんどん次にいくんだけど、学びっぱなしで地域に還元がない。というんですよね。それじゃあ地域は盛り上がらない。どうしたらいいんだろうかということで、今、東広島市では、下のアンダーライン引いてあるところですが、市でも「学びの好循環」を育成するために、社会教育関係者に対して多様な研修の機会を設け、生涯学習に関する研修を行い、また、コーディネーター研修など、実践的な内容も入れながら専門性の向上に努めています。一生懸命講座とかやっても、皆やることがないから、ウォーキングクラブとか体操クラブとか色々作っていくんだけど、それでもただ学びっぱなしになる。だからその中に新しい先生が育たない。育った人が周りを巻き込んでくれない。さあどうしたらいいんだろうか、となればやっぱり何かちょっと足りないんだろうということで、東広島市も慌てて社会教育課関係者の研修を、今社会教育士をどんどん育てていかなければならないということで進めているということでございます。以上ご報告でございます。ありがとうございました。

事務局 ありがとうございます。

事務局 では、私のほうは第1分科会に参加してまいりましたので、そのご報告をさせていただきます。第1分科会のテーマ、「地域学校協働活動による地域力の向上」というテーマになっており、青森県の社会教育委員長の方が「学校を核とした地域づくり」というテーマ。それから、高知県の高知市中学校長の小川先生からは、「持続可能な地域とともにある学校の実現」というテーマでお話をいただいております。内容に関しては、この報告書を見ていただけたらと思います。これを受けて、私が感じたことだけ述べさせていただけたらと思います。2つの事例発表ともコミスクや地域学校協働活動を始めたばかりという内容のものでした。山口県においては、平成28年度から全小・中学校でコミュニティ・スクールが導入されたこと、それから本市においてはそれ以前から、学校支援地域本部事業により組織的に地域の方が学校へ入る仕組みが出来ていたんだということがあります。今回の事例発表を聞いて、山口県というか山陽小野田市は学校と地域のつながりがしっかりできているアドバンテージが他県よりあることを改めて確認することができました。今後は、この仕組みをどう活かしていくか、より充実した活動内容にしなければならないなど感じたとともに、少子高齢化もあるので、活動に関わる賛同者の確保に力を入れなければならないと感じたところでございます。

事務局 失礼します。第2分科会の家庭教育支援について報告いたします。お手元にございます資料5の16ページをご覧ください。鹿児島県の霧島市の社会教育委員の方のお話を聞いてまいりました。私も同様に感じたことのみお伝えしたいと思います。霧島市の取り組みが16ページから紹介されていきますが、19ペ

ージをお開きいただけますでしょうか。19ページに成果と課題と書かれています。4段落目に感染対策を取りながらの運営は大変だなという文言があると思いますが、ここに「何処にも行くところがなかった」という声があって、サロンがあって良かったという話をされていました。

実は昨日、県庁にて開催された家庭教育支援に関する研修に参加してきました。その際に、保護者に対しての相談機関、居場所の周知とつなぎ役の重要性についての研修がありました。広島大会でも実は同じ話がありまして、保護者の相談機関、居場所づくりは非常に重要だという話があったのですが、やっぱり相談機関の周知だけで終わらずに、実際につないであげるところまでを支援することが重要であると。そうすると、ここまでしていただける支援者の方は、大変重要であるという話を聞いてきました。今日皆さんのお手元にクリアファイル、透明のクリアファイルに、カラーの「家庭教育支援チームって知っちゃる？」というタイトルのチラシを入れさせていただいております。社会教育課が事務局をしております本市の家庭教育支援チームのちらしになります。裏面に相談機関を載せています。来年度に入学される保護者の方、全保護者の方にこのチラシを配布しているんですが、こういった相談機関の周知だけでなく、本市の支援チームの方は実際につなぐという支援もされています。そういう意味で、霧島市の実践を聞きながら、本市においては決して劣らない支援を行っていることができていると感じました。それから、家庭教育支援においては、教育部局のみの活動ではなくて、福祉部局との連携・協働は大変重要であると感じました。こちらは広島大会でも聞きましたし、昨日の県の研修でも聞きました。教育、福祉、両関係者の出席、両側面からの内容についての研修が行われている現在です。本市においても子育て支援課とさらなる連携・協働を進めていく必要を感じたところです。第2分科会の報告は以上になります。

それでは、家庭教育支援チームのチラシと一緒にカラーでチラシが入っていますけど、こちらの「窯のまち」についてもよろしくお願ひします。

事務局 それでは、報告のほうは以上になります。

委員長 はい、では今広島大会の復伝がございましたが、皆さん何かご意見なり、ここが聞きたいなんてことがありましたら、挙手をお願いします。よろしいですか。それでは、あとまたゆっくり資料をお読みください。お願ひ申し上げます。それでは、第2番目の中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理についてということで、資料の3。今日の会議の資料の17ページですか。報告をお願いします。

事務局 失礼いたします。社会教育課の縄田と申します。よろしくお願ひします。私のほうから、第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理についてご説明をさせていただきます。座って説明をさせていただきます。令和4年8月、文部科学省は第11期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理、

全ての人のウェルビーイングを実現する、共に学び支えあう生涯学習・社会教育に向けて、を公表しました。こちらは、現在、生涯学習・社会教育をめぐる課題として、社会はライフスタイル等の変化により、人と人とのつながりの希薄化、困難な立場にある人々などに関する課題が顕在化、深刻化していること。また、新しい資本主義に向けた人への投資の充実、デジタル社会の進展への対応の必要性が増大していること。このような課題を解決するために従来の生涯学習・社会教育の役割である学びによる自己実現、また、学びを通じた人づくり、つながりづくり、地域づくり等の役割に加え、先ほど申し上げました課題の解決に向けて生涯学習・社会教育が果たしうる役割や今後の振興方策等について、議論を行いその結果を取りまとめたものとなっています。

今後、生涯学習・社会教育が果たしうる役割として、個人の幸福と周囲との良好な関係によるウェルビーイングの実現。また、困難な状況にある人々を取り残すことなく学習機会を与える社会的包括の実現。デジタルデバイドの解消。デジタルリテラシーの向上によるデジタル社会への対応。リアル、オンライン双方でつながる場の提供。コミスクや地域学校協働活動での住民の参画による地域コミュニティの基盤づくり、等をあげています。

今後の振興方策が5つ挙げられています。最初が公民館等の社会教育施設の機能強化。次に、社会教育人材の養成・活躍機会の拡充。3つ目として、地域と学校の連携・協働。4つ目としてリカレント教育の推進。最後に、多様な障害に対応した生涯学習の推進、の5つを振興方策として掲げています。内容別に見ていくと、まずは、公民館等の社会教育施設の機能強化についてですが、公民館等の役割の明確化。また、デジタル基盤の強化、リアルとオンラインの双方で住民が相互に関係性を持つ共同学習、交流の促進を挙げております。次に、社会教育人材の養成・活躍機会の拡充についてですが、多様な分野の施策と連携して調整機能を果たす社会教育士の配置促進を掲げ、役割や称号付与の見直しといった制度の在り方を検討するとしています。また、地域と学校の連携・協働についてですが、コミュニティ・スクールについては全国的に導入を加速していき、また、部活動の地域移行を推進するため、社会教育団体などの連携を積極的に行うよう提案をしています。その次のリカレント教育の推進につきましても、時間的・経済的な制約がある中で個人に応じた学びを必要とし、大学・専門学校におけるリカレント教育プログラムの充実。また、社会人が受講しやすい時間帯・期間・受講形態等の工夫、情報発信の充実、学習履歴の可視化の必要性を示しております。最後に、多様な障害に対応した生涯学習の推進についてですが、障害者の生涯学習の施策についての明確化、障害者の生涯学習を推進する人材の育成・確保などを挙げたものとなっております。簡単ではございますが、以上説明とさせていただきます。

委員長 はい、ありがとうございました。委員さんからのご意見をお伺いします。

委員 今、色々ご報告いただきましたが、要はこの問題点とテーマはわかるのですが、

それをどういふふうに対応していくかというのが問題ではないのか。その具体的な事案をこゝう場で話さなければならぬのではないかと思ふんですが、それはどこでどういふふうにするのですか。それともう一つ。先ほど、公民館から地域交流センターに変わったという話があったんですけど、センター長の意識がどれだけ変わっているかということが一つと、それと、センターそのものが、地域の住民の人たちにどういふふうに関わりかけを始めているのか、ということが社会教育に求められている。地域の人たちのニーズに合わせた講座なりテーマなりのものができると思ふのですが。そういうことは今どこまで行われているのでしょうか。このアンケートを見ますと、地域交流センターが公民館からどういふふうに変ったのか、というアンケートではなく、要するに住民の方へのアンケートですよ。だから、地域交流センターに変わったんだという意識をまずセンター長がどこまで持っているのか。それと、地域交流センターですから、地域の人たちとどのように交わりっていくか、という方法をどうするかということだと思ふ。公民館だった時代に色々話を聞くと、だいたい各地域は、地区の自治協というのがあります、自治会協議会。それと、地区の社会福祉協議会。それと、地区のふるさとづくり協議会。また、老人会やPTA等色々な団体があると思ふのですが、そことほとんど交流のない公民館もあるという話を聞いている。地域交流センターとなると、センター長が少なくともそういう地域のことをしている団体の人たちと話をしながら、どういふふうに行っているのか、とか、この地域はどういふものなんだ、等をまず把握していくことが必要と思ふ。それと、地域交流センターからどのように情報を発信していくか。赤崎では、こゝう講座をするよという回覧があるくらい。

委員長 はい、ありがとうございます。この後、まだちょっと話し合いの場がありますんで、その時にお話ししたいと存じます。今中央教育審議会の議論と整理ということで、一枚の紙にたくさん書いてありました。今頃のSDGsと同じように多くの目標を掲げている。今、コンピューターが発達しているから整理は簡単ですよ。問題点ばかり多く挙げてくる。そして、あとはやりなさいと言ってくる。やりなさいと言ってくるが、どうやっていいかわからない。これが今の交流センターと同じです。交流センターは令和4年度からやると言いながら、何をするのかと質問しても回答は返ってこない。そういう時代ですから、社会教育委員会として、どうあるべきか、ということは今からちょっと考え、もっと具体的なことにしていきたいと存じます。

それでは、次に行きたいと思ひます。事務局よろしくお願ひします。このカタカナ調べるのは大変でした。わからない言葉ばかりです。デジタルデバインドとか、ウェルビーイングとか。パソコンで検索すると、なるほどなと思ひけど。

事務局 失礼します。では、次の準備をする間に少し寒いですが、換気をさせていただきます。

教育部長の藤山です。遅れて来て申し訳ありませんでした。今日はよろしくお願ひします。

(換気終了)

すいません。ご協力ありがとうございました。

委員長 はい、では事務局は次をよろしくお願ひいたします。

事務局 はい、では3の議題に入ります。「人材発掘を企図した地域交流センター主催事業の具体について」、地域貢献を進める人づくりの実践、ということでグループ協議に入りたいと思います。今から短い時間ですが、グループでお話し合いをしていただくため、今日の席の配置、また、今からのご説明をさせていただきます。今からスライドを使ってご説明をさせていただきます。後ろのスクリーンをご覧ください。「人材発掘を企図した地域交流センター主催事業の具体について」、地域貢献を進める人づくりの実践、というテーマでセンター主催の講座やイベントでどのようなことに取り組んだらよいか、今からの時間を使ってご協議いただきたいと思います。昨年度作成いただいた提言書や本日の報告事項を踏まえ、グループでお話をいただき、ご協議内容を今後のセンター主催事業に反映していければと考えています。それでは、まず昨年度の提言、また、本日の報告事項について、簡単に振り返っていきたく思いますので、しばらくお付き合いください。

まず、昨年度の9月に皆様に作成頂きました「公民館の地域交流センター化に関する提言書について」です。お示ししております4つの柱で提言書は構成されました。1、地域住民の学習の拠点としての役割・機能について。2、地域づくり・人づくりの拠点としての役割・機能について。3、適正な職員配置と予算措置について。4、その他、公共性の担保について。この度は2番の「地域づくり・人づくりの拠点としての役割・機能について」に着目していきたく思います。地域づくり・人づくりの拠点としての役割・機能については、3つの項目立てをしておりました。1番の地域団体の育成・支援。2番の地域人材の発掘・育成支援。3番の学校・家庭・地域との連携・協働についてです。さらに、この度は2番の地域人材の発掘・育成支援について着目していきます。こちら提言書の抜粋になります。小さい字で見にくいのですが2の2、地域人材の発掘・支援について、アンダーラインを読ませていただきます。センターは「地域づくり」の一つとして、若い力の発掘と活動への引き入れを企図しなければならない。若者層が主人公として活躍できる機会の提供（受益者感覚だけではなく当事者意識を持った参画）を行い、地域参画意識の醸成を図っておくことが必要である、としています。次の世代の発掘・育成、地域づくりの担い手の発掘・育成ということが昨年の提言書に盛り込まれているところでございます。

次に、先程説明したアンケート結果を振り返りたいと思います。問2のアンケート回答者の8割以上が女性であるということがありました。センターへ関心がある方の8割以上が女性であるという事から、男性の割合を増やすような取組も必要と考えます。また、問3の年齢層ですが、70歳代が3割以上で一番多い。続いて40歳台、30歳台と回答者はいるもののそのほとんどが、電子申請による回答者となっています。若者層を取り入れる事業が必要と考えています。問9は、センターが充実すべきサービスは何ですか、の問いに対して主催講座が271人と最多となっています。今、センターを利用している人、利用していない人に関わらず、両方ともセンターの主催講座が一番に今後の充実を望まれていらっしゃるというところでした。問12であったのですが、利用にあたっての意見の中で、「正直、今の利用者は高齢者・暇な人という感じです。民間のプロにちゃんとお金を払ってでも受けてみたいという内容でもないし…」というきびしい意見も頂いております。

続いて、10月26日に開催された社会教育委員広島大会、シンポジウムで出た意見です。中学生が地域と関わり続けることが大事だよ。だけど、大人がストーリーを作りすぎないように子どもの意見を待つことも大事じゃないか。子供たちの意見をどう取り入れていくか。親を集めるには、どのような仕組みを作るか。その答えとして、楽しいから始める、やりたい、やってみたいと言いやすい環境づくりが大事じゃないか。それを受けて、何でもいいから話せる関係性の構築が必要ではないか。という話になりました。それから、公民館やセンターの講座として参加するだけの講座としない。サービス過多としない、しすぎない。職員がすべてを用意しすぎないように、という意見が出ていました。まとめとして、社会教育の土壌をしっかりと作り、そこにすぐに花を咲かせたがらないこと。先ほどの吉本委員長のお話にもあったように、土壌を作って、結果は大事だけど結果をすぐに求めないように、という意見をおっしゃっていました。

最後に、今年度の中教審の議論の整理、先程縄田の方から説明があったものです。こちらが抜粋したものです。1番の現状と課題として、人への投資の充実が必要ではないのか。3番の今後の生涯学習・社会教育の振興方策については、公民館等の社会教育施設の機能強化があげられておりました。公民館の役割の明確化が必要とされています。例として、社会的包摂の実現、子どもの居場所づくりとしての役割、地域コミュニティづくり等が謳われていたところです。

最後になりますが、本市においては、現在センターにおいて人材の発掘・育成に向けた主催事業を行っております。その中で抜粋したものが、以下のような取組を今年行っております。前回のこの会議でもご紹介しましたが、須恵では若者を対象とした魚のさばき方講座、本山のeスポーツを題材とした大学生と地域住民それと親子と一緒に参加した講座、3番は写真がありませんが、夏休みに開催する親子で参加する夏休み体験教室、4番目、左の写真です。地域の方が集まりセンター主催講座の企画委員となり講座を考える有帆の「まなび

とふれあいカフェ」、5番目が外国人労働者を対象とした埴生日本語講座、などに取り組んでいただいております。その他にも、例えば歴史民俗資料館の企画展で、昨年山陽小野田市のスポーツ史という企画展を行いました。歴史民俗資料館の企画展は、ある程度、歴民リピーターがいらっしゃるのですが、このスポーツ史は、スポーツに興味のある方も多く来館され、初めて資料館に来られるという方も結構いらっしゃったようです。このように、本日は、人材発掘というテーマに絞っていただいて、新たな来館者層の獲得に向けてセンターでどのような講座を行えば良いか。新たな来所者の獲得、人材発掘につながるかをご協議頂ければありがたいなと思っています。すいません、時間がだいぶ押していますので、ほんとは20分間時間を取りたいなと思っていましたが、10分、15分位ですが協議の時間を持ちたいと思います。皆さん各グループでそれぞれご自身の現在活動されていらっしゃることも取り入れながら、センターでの事業について、どのような内容にしたら人が増えるか、若者が増えるか、協力者が増えるか等についてご協議を頂ければと思います。

進行役等は、グループの中でお決めいただければと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。協議した内容を紙ベースで提出してもらうことはしませんが、最後に情報共有はしたいと思っています。それぞれのグループで話し合われたことを簡単にお話しいただければと思っております。あわせて発表者もお決めいただければと思います。それでは、10分しかお時間ありませんが、11時50分までご協議をよろしくお願ひします。

事務局 ではすいません。時間が11時50分となりました。盛り上がっているところ、申し訳ありません。それでは、各グループで出た意見を情報共有させていただきたいんで、それぞれのグループがどのような話をしたか、ご発表いただければと思います。

委員 グループA

ここの3人のグループでは、テーマが人材育成ということでしたが、センターへ来るきっかけづくりとして、中・高生や子育て世代が放課後や土日に集える場としてサロンやカフェを設置し、誰でも気軽に来ることができる雰囲気づくりを行う必要があるのではないかという意見がでました。そこに集まった人たちが情報交換することが、また新たな人材発掘につながってくるのではないかと。そういったサロンやカフェという場づくりが、一番の近道ではないかというご意見がこのグループで出ました。以上でございます。

グループB

それでは失礼します。ここのグループでは、まずそれぞれの地区の人達がどのようなことに興味を持っているのかをアンケート等により情報を集め知る。そ

して企画、講座をつくることで、新たな人材の発掘につながるのではないかと。そういった中で、人づくりはセンターだけではできないので、地区の多くの団体とつながりながら、人づくりを進めていくのが望ましいのではないかと。学校とも協力をして、小学校・中学校の保護者、児童・生徒へのアンケートを行うことで、地域の人、若い世代の関心を知ることができるのではないかとという意見もありました。また、回覧だけではなく、アンケートだけではなく、生の声を小単位、小さなグループの色んなところで聴くことも大事であるという意見もありました。以上です。

グループC

ここのグループでは、色々話が出ましたが、昔でいう公民館祭りのような、地域のたくさんのグループ。小学校なら小学校、中学校なら中学校のグループがある。お母さん方のグループがある。公民館クラブがある。そういうのが全部発表できる場、昔の公民館祭りですね。文化祭みたいところでやって、大々的に祭りをすれば、それに関連する人が集まって、今までセンターに来たことがない人がどんどん集まるので、そこで新たな交流の場ができる。そこで、交流センターに足を運ぶ人が増えるのではないかと。その中から、新たな人材を見つけることができるのではないかと。という話でございました。

事務局 皆様ありがとうございました。短い時間でしたが人材発掘について、今回の協議内容を毎月行っているセンター長会議で報告し、センターで行っている主催事業に反映していきたいと考えています。すぐに反映させることは難しいかもしれませんが、現在でも各センターでは多くの講座を開催していますので、委員の皆様には、外出される際にはセンターに立ち寄っていただいて、主催講座やクラブ活動を見学していただき、センターの実際というのを見ていただきたいて、何か一緒にご協議いただけると非常にありがたいなと思っております。それでは、3の議題については終わりにしたいと思います。

委員長 それでは、議題は終わりました。何か全体的に意見等あればお願いします。

委員 失礼します。アンケート結果に戻るんですが、色々とお教育委員会の皆さんありがとうございました。私は、1番高齢化率の高く人口の少ない厚陽地区に住んでいます。自治連の会長の千々松会長が、「うちの地区は高齢化・少子化が進んでいるからわしはもう辞める、何にもできん。わしはもう身を引く」といつもおっしゃっている。けど人生100年ですよ。まだまだ委員長と一緒に25年以上皆もまだまだできます。だからこのアンケートを見ましたら、厚陽はな

んと88件もある。これは今度、校区の運営協議会で皆さんの前で発表します。これだけ、厚陽の方は意識がある。意識があればできる。これを皆さんに伝えていきたいと思います。そして、厚陽がんばります。以上です。

(拍手)

委員長 はい、どうもありがとうございました。

委員 ちょっといいですか。先ほど大本さんから話がありましたが、4月以降公民館が交流センター化しましたが、大変説明不足の中で発車したが、センター長のほうから、何か変わったような報告はありませんか。センターから困っているとか、変わって良かったとか。事例はありますか。なかったらいいですよ。

委員長 事務局何かありますか。ではそれを次の会議までにまとめてご報告をお願いします。それでは、終わりにしますので、課長さんからご挨拶をお願いします。

事務局 失礼します。本日は大変お忙しい中、ご出席をいただきまして誠にありがとうございました。ちょうどチャイムもなっていますが、今日は、「人材発掘を企図したセンター主催事業の具体について」というテーマでご協議をいただきましたが、その前の中教審の議論の整理の中で、細かい字で幅広いことが難しい言葉で書いてある。途中で委員さんからの意見もありましたが、これを受けて我々がどういうふうに対応していくかが非常に大切だと思っています。そんな中で、今日は人材発掘を企図したというところに着目した協議をしていただきました。非常に有意義な議論であったり、情報であったりアイデアをいただきましたので、それらを整理しながら今後の取組につなげていきたいと思います。

時代がどんどん変わっていく中で、社会教育に求められるものは非常に多岐にわたりますし、より複雑化しハイレベルになってきていると感じます。そんな中でも、事業を進めなければなりませんので、社会教育委員の皆様には今後ともお力添えをいただきながら取り組んでまいりたいと思いますので、今後ともご協力のほどよろしくお願ひいたします。本日は大変ありがとうございました。

事務局 それでは、第2回社会教育委員会議を終了いたします。吉本委員長、議事の進行大変ありがとうございました。

委員 (拍手)

事務局 それでは皆様、大変お疲れ様でした。

